

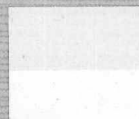
10

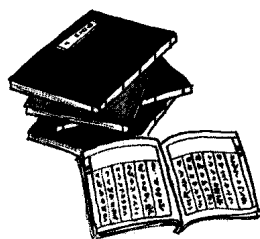
一七二七—一七五五（江戸）

古典の事典

精髓を読む
日本版

河出書房新社版





古典の事典〈精髓を読む——日本版〉

⑩ 一七一七—一七五五（江戸）

昭和六十一年六月十七日 第一刷発行

編纂 古典の事典編纂委員会

発行者 清水 勝

株式会社 河出書房新社

発行所

東京都渋谷区千駄ヶ谷二丁目三番二号
電話〇三—四〇四—一二〇一

印刷

大日本印刷株式会社
株式会社 サンコー

製本 大日本製本株式会社

©1986

無断転載複製を厳禁する

ISBN4-309-90210-3 C0591

10 一七一七―一七五五（江戸） もくじ

まえがき 近代の萌芽としての江戸期合理主義

俳諧七部集

世界に類のない共同体文芸

折たく柴の木

前近代における自叙伝文学の傑作

駿台雑話

堅苦しさを排した庶民のための学問

古史通

合理的方法論を導入した古代史研究書

常山紀談

戦国時代の名将・武人たちの言行録

関八州古戦録

北条氏康の滅亡までの関東動乱史

蝦夷志

わが国最初の蝦夷地理誌

七

一五

二九

三七

五一

六五

七七

八九



近江国輿地志略

近江商人の舞台をさぐる

一〇三

五畿内志

江戸幕府最初の官選地誌

一一七

白隠禪師法語

日本臨濟禪の中興の祖の法語集

一二七

日本書紀通証

更証的語釈による研究注釈書

一三五

弁道

古文辞学を唱えた著者の独創的学説

一四七

女大学

江戸時代に広く読まれた女子の教訓書

一五七

都鄙問答

町人道を説いた石門心学の原点

一六九

翁の文

自由な批判精神発露の書

一七九

自然真営道

封建社会を批判した独創的思想書

一八九



政 談

幕政の問題点と対策を説く

二〇三

温知政要

もう一つの享保の改革

二一七

経 済 録

窮乏する幕藩体制に不可欠な経世論

二二七

心中天の網島

浄瑠璃の醍醐味を味わえる名作

二四一

女殺油地獄

殺人事件に題材を借りた恐ろしい戯曲

二五三

菅原伝授手習鑑

構成と脚色の妙が傑出した一大名作

二六三

義経千本桜

『平家物語』を素材とした判官物の傑作

二七五

仮名手本忠臣蔵

時代を超えて万人を魅了するドラマ

二八七

京鹿子娘道成寺

日本舞踊の魅力を余さず伝える作品

二九九



鈴 録

卓越した儒学者の著した兵書

三〇九

天狗芸術論

剣の極意に芸術を追求した剣術論

三一九

槐 記

諸芸に通じた公家教養人の言行録

三二一

香道蘭の園

流儀を超えて故実を伝える姿勢

三三九

香会余談

大名家によって栄えた米川流香道

三四九

蕃 考

実証を重んじ時代を救った実学の書

三五九

町 人 囊

財力におごる町人への警鐘

三六九

大略天学名目鈔

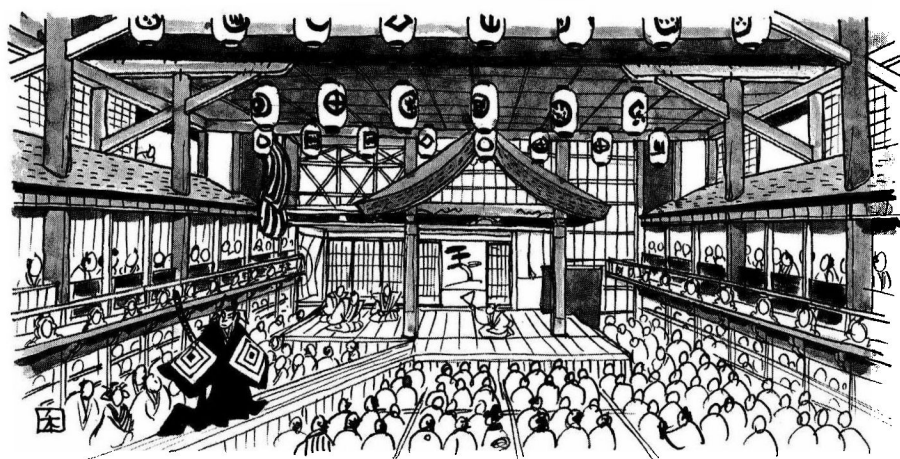
江戸中期の天文学の概説書

三八三

長崎夜話草

長崎の歴史上の性格を鮮やかに描く書

三九三



この事典を利用される前に

○第十巻について

(一)この巻では、一七一七(享保元)年から一七五五(宝暦五)年の間に成立・刊行された古典を三十四作品収録しました。成立・刊行年の未詳のものについては、作者の生没年を拠りとしました。

(二)この巻に収録した古典は、それぞれ文学、歴史、宗教・哲学、社会、演劇・歌謡、芸道、産業、科学、地理・民俗のジャンルに大別して、時代順に配列してあります。

○中扉について

(一)収録古典にはすべて中扉をもうけて、分野、書名、著者・編者名、「この古典の五つの魅力」を表示し、原本写真を掲載しました。

(二)書名、著者・編者名などに二つ以上の書き表し方、よび名がある場合には、学界・教育界で定説となっているもの、一般に広く用いられているもので表記することにしました。

(三)中扉の「この古典の五つの魅力」では、作品の要点、分野、歴史的価値、後世への影響、現代との関わりなど五つの観点から、その古典の特色を簡潔にまとめました。

(四)また中扉には、現存する貴重な原本(版本・写本・古活字本など)から、本文の一部を写真版で掲載しました。とくにこの巻でとりあげた「読みどころ」と関連の深い箇所は、参照頁を表示することにしました。

○解説について

(一)作品の解説は原則として「あらまし」「原典の構成」「成立の時代」「影響と価値」「原典と参考書」「作品の舞台」「しおり」の七項目をもうけ、どこからでも容易に検索、読めるようにしました。ただし、作品によっては、必ずしも適合しない項目もあり、その場合には他の詳記すべき項目に重点をおき、その項目は省略することにしました。

○読みどころについて

(一)読みどころでは作品の重要な場面、また一般に多く引用される箇所を抄出して、上段に原文を、下段に現代文を併載しました。

(二)主要な作品については、鑑賞の手引きとなるように、現代文の冒頭に抄出箇所の概要を添えることにしました。

(三)原文の仮名づかいは原則として、歴史的仮名づかにしましたが、読みやすさを考慮して、ふりがなは現代仮名づかにしました。ふりがなは外国の地名や特殊な用語を除き、すべて平がなで付すことにしました。

(四)原文も新たにふりがな・送りがな・濁点・句読点・並列点(中黒)・段落を施し、さらに会話文・引用文には「」や「」を、書名には『』を加え読みやすくしました。また原文中の割注・頭注は()でくくり、他の引用文と区別しました。

(五)原文中のく、などのくり返し符号は使用せず同字を重ね、漢文体も読み下し文(平がなまじり文)にして、原文の読解鑑賞に役立つように配慮しました。

(六)現代文は、わかりやすい内容にするために、難解な語句は説明を補記し、また旧地名は現地名を、和暦年数は西暦年数を表示することにしました。

○監修者

石井良助（東京大学名誉教授・法学博士）

伊藤鄭爾（元工学院大学学長・工学博士）

井上靖（小説家・芸術院会員）

数江教一（中央大学名誉教授・文学博士）

角田文衛（平安博物館館長・文学博士）

暉峻康隆（早稲田大学名誉教授・文学博士）

奈良本辰也（歴史家）

古川哲史（東京大学名誉教授・文学博士）

松浪信三郎（早稲田大学名誉教授）

山本健吉（文芸評論家・芸術院会員）

○編纂者

朝倉治彦（国立国会図書館司書）

遠藤武（文化女子大学教授・文学博士）

大曾根章介（中央大学教授・文学博士）

北小路健（歴史家）

紀田順一郎（評論家）

久保田淳（東京大学教授・文学博士）

祖父江孝男（放送大学教授）

田辺聖子（小説家）

谷沢永一（関西大学教授・文学博士）

馬場あき子（歌人）

春田宣（国学院大学教授・文学博士）

松田修（法政大学教授）

松本寧至（二松学舎大学教授・文学博士）

黛弘道（学習院大学教授・文学博士）

宮田登（筑波大学教授・文学博士）

吉田豊（歴史家）

近代の萌芽としての江戸期合理主義

†『忠臣蔵』に熱狂した庶民の道義感覚

本巻には江戸の太平が百年を越えてから三十年間ほどにわたる、多彩な文化的業績が紹介されています。

ひと昔前と比べると、この時代には庶民教育の普及によって民衆の教養が著しく向上し、一方、知識階級や上層町人のなかから、次の時代を先取りするような独創的・先進的な見解が出はじめてきます。

この時代の民衆文化の発展を象徴するできごととしては、はじめ人形浄瑠璃の台本として書かれ、のちに歌舞伎脚本としても、今に至るまで人気を保ちつづけている三大名作が、僅か三年の間に続いて発表されたことがあげられます。その名は『仮名手本忠臣蔵』『菅原伝授手習鑑』『義経千本桜』。作者はいずれも、大阪竹本座の座付き作者である竹田出雲・並木千柳・三好松洛の合作です。

座付き作者の合作による書きおろしという創作の方法は、当たる、当たらないを最大関心事とする興行資本の要請にまことによくこたえたものでした。三人は熱心に協議を重ねて全体の構想を練るとともに、持ち場を分担して、自分の持ち場が客の喝采を受けるように競い合いました。たとえば『菅原伝授手習鑑』では、三人がそれぞれに、肉親の別れを主題として腕を振るい、今もしばしば上演される名場面を遺してくれました。

観客大衆に喜ばれるにはどうしたらよいかを一人の天才が考えるのではなくて、興行資本の意を受けた複数の作者によるプロダクション方式をとることで、みごと成功したのです。

この三つの大作は、いずれも芸術性・娯楽性・倫理性が渾然一体となった名作ですが、それが熱狂的なまでに喜ばれたのは、観客の側に、これを受け入れるだけの十分な下地が熟していたためにほかなりません。

その一つとして、この時代の民衆の道義観念が向上して、この三大名作の主要テーマである忠義・献身の美

徳に共感できるようになったことがあげられます。

かつて主従の心のきずなは武家階級だけのものであり、商人の世界での使用人は、使い捨ての労働力としてしか扱われていませんでした。博多（福岡市）の豪商島井宗室が、慶長十五年（一六一〇）に記した遺訓には「下男・下女はすべて盗人と心得よ」とあり、ひたすら監視をきびしくせよと力説しています。

しかし江戸時代中期に入って商家の経営が発達して、奉公人の一人一人の自発性が商売繁盛の要件となるにつれて、商人の世界でもお家という運命共同体の結束が重視されるようになります。主人のために誠実に努力することが自分自身の幸福にもつながるという「お家あつての自分」の意識が、こうして広く民衆の間に根づいていったのです。

為政者の側もまた、社会の安定のために、このような庶民道德の振興につとめました。

幕府は室鳩巢・荻生徂徠などすぐれた儒学者を登用して民衆教育の方針を定め、忠孝の励行をすすめる御高札（一名、忠孝札）を所要所に建てたり、日常道德の実践教科書である『六諭衍義大意』を大量に配布するなどの文教政策を進めました。

このような社会的条件の成熟と、上からの教育によって、広く庶民の間にも、主君のための献身に共鳴できる感情が根づき、四十七士（赤穂浪士）の快挙に対しても武士以上に熱狂、礼賛するまでになったのです。

それは現代人の感覚からすれば、古臭い封建道德とみえるかもしれませんが、みずからの属する組織のために進んで身を捧げようとする意識が普及・定着したことは、前の時代に比べての大きな進歩でした。

この「忠義」の心は、江戸時代商業社会を内側から支えただけでなく、現代においても所属組織への忠誠心として生き続け、日本経済発展の有力な要因となっているように思われます。

↓ 人権尊重に徹した徳川宗春の悲劇

世の中が落ちついてくるにつれて、支配階級である上層武家の中にも、武力による力の支配ではなく、愛情

ある政治と教育によって民衆の心をつかもうとする「名君・仁君」が現れてきます。

本巻の時代に先立つ名君として知られる備前岡山藩主池田光政（慶長十四、天和二年＝一六〇九、八二）は、家臣一同に対する訓戒（承応四年＝一六五五）の中で「家中の者たちは、当家は農民ばかりを大切にしておいて武士を粗末にしていると言っているようだが、もつてのほかのことである」として、つぎのように述べています。

「農民が安心して生産に励んでこそ、武士も町人も養われるのだ。その農民を大切にすることを仁政を乱そうとする者こそ、辻斬り（試し斬り）・強盗にもまさる大悪人である」と。

光政は「民は国の本」と固く信じて、当時としては珍しく農民尊重の政策をつらぬきました。しかしその立場は、光政自身が別のところで、「上様（將軍家）からお預かりしている民衆を困窮させることは、上様に對する大不忠である」（『申出覺』）と言っているとおろ、封建支配の安泰を図るための農民尊重であつたのです。これに對して、本巻でも紹介されている尾張藩主徳川宗春の『溫知政要』の政治論は、民衆の幸福そのものを政治の基本目標としている点で、より一層、前進したものといえます。

宗春は同書の中で裁判の心得として「たとえば千万人の中の一人を誤つて処刑したとしても、それは天の道にそむくものであり、大名として大きな恥辱である」と述べ、無実の罪で人を罰することのないよう、くどいほど念を押しています。事実、宗春が藩主の座にあつた六年間、尾張領内で死罪となつた者は一人もありませんでした。封建時代の支配者で個人の人權をこれほど真剣に重んじた人はちよつと見当たりません。

宗春の自由開放主義の藩政は、折から八代將軍吉宗が進めていた嚴格な統制主義の享保の改革と真つ向から對立し、宗春はついに藩主の座を追われて、その理想を実現することはできませんでした。しかし彼が遺した一言一句には、人間の可能性への楽天的な信頼が溢れており、読む者の心を打ちます。

宗春こそ、あまりに早く生まれすぎた悲劇の名君」ということができましょう。

† 商人の存在価値を宣言した如見と梅岩

わが国の商人階級は、江戸時代前期の百年間に、武家階級の支配下にありながら、経済の主導権をほぼその手に握ることに成功しました。

そして江戸時代も中期を過ぎると、単に経済の世界で大きな力を発揮するだけでなく、思想や教育の分野でも、後世に残る業績をあげた商人が続々と登場します。

長崎の貿易商出身で、儒学・天文・曆学にすぐれた西川求林斎如見（慶安元々享保九年＝一六四八～一七二四）もその一人で、本巻に紹介されている『町人囊』の著者としてよく知られています。

同書は体系的な理論書ではなく、思いつくままに記した随筆的教訓書ですが、当時、武家社会から見下げられていた町人の社会的役割をはっきりと宣言したことに、その思想的な意義があります。

如見は「ある人の言葉」として「水は万物の下にありて万物をうるほし養へり。町人は四民（士・農・工・商）の下に位して、上五等（天皇・將軍・大名・旗本・御家人）の人倫に用あり。かかる世に生まれ、かかる品に生まれ相ぬるは、まことに身の幸ひにあらずや」と述べています。商人は身分こそ低いとされてはいるが、この世に水がなくてはならぬように、社会にとって欠かすことのできない存在なのだというのが、その真意でしょう。

商人の役割を水にたとえた如見の発言には、中国古代の思想家老子の強い影響が感じられます。

『老子』第八章には「上善は水のごとし」（最高の善とは水のようなものだ）とあり、「水は万物を助け育てながら自己を主張せず、人々の嫌う低いところへと流れていく」と説かれています。如見は、武士階級によって人為的に定められた身分序列を逆手にとって、最下位に置かれた商人こそが世の中をうるおす力を持っていることを明らかにしたのです。

商人のためのやさしい人生哲学「石門心学」の創始者石田梅岩もすぐれた町人学者です。

丹波国桑田郡東懸村（京都府亀岡市）の農家の次男に生まれた勘平は、十歳をすぎると京都の商家に丁稚奉

公に出て、一人前の商人となる修業を積みまします。その中で彼は商人として生きることの意味を真剣に探究しつづけ、四十三歳で石田梅岩として学問の道に専念します。

志とともにする弟子たちと民主的な討論を重ねてまとめあげた『都鄙問答』^{とひもんどう}が完成したのは、元文三年（一七三八）のことです。

同書には梅岩の人間観・社会観が総括的に語られており、彼に始まる石門心学（石田先生に始まる心の学問）の意味）の出発点となりました。とりわけ注目されるのが、商人の社会的役割を明らかにし、正当な利潤を追求する権利を堂々と主張したことです。

梅岩は、商人が売買によって利潤を得るのは、武士が俸禄^{ほうりく}（給与）を、農民が收穫物を、職人が工賃を得るのと同じ正当な行為であり、もし利潤を得るための売買を禁止したならば、物資の流通が停止して、世の中は大混乱に陥るだろうと指摘しています。

そして、利潤追求の権利は、不正を犯さず正直をつらぬく義務を果たしてこそ主張できるのだとして、商業倫理の確立を訴えているのです。

徳川時代に生きた思想家である梅岩は、士・農・工・商の身分秩序を是認してはいますが、彼の主張の根底には、人としての道を守る義務において差別はないという平等観が流れています。武士も、農民も、商人も、それぞれの道を守ってこそ、武士であり、農民であり、商人であるのだということです。

「士農工商ともに天の一物なり。天に二つの道有らんや」の一句には、その確信が溢れています。

心のよりどころ、生活の指針をわかりやすく説いた梅岩の教えは商人におおいに歓迎され、齋藤全門^{さいとうぜんもん}・手島堵庵^{とあん}などすぐれた後継者によってさらに発展しました。幕府も、庶民教育の一環としてこれを保護したため、江戸時代を通じて石門心学は繁栄を続けます。

しかしその中では、当初、梅岩が主張したような平等観や、上に立つ者の道義的責任をきびしく求めるよう

な要素は次第に薄められて、与えられた境遇に満足し、他をうらやむことなく勤めを果たせという、封建の世にふさわしい生活訓へと変質していったことも否定できません。

いま一度、『都鄙問答』にじかに接して梅岩の初心に触れるならば、現在大きな問題となっている企業の社会的責任を考える上でも、有力な示唆が得られるのではないでしょうか。

† 富永仲基の宗派主義とのたたかい

商都大阪に、商人自身の力で、商人のための学問研究と教育の機関懷徳堂が設立され、幕府の公許を受けたのは享保十一年（一七二六）のことでした。設立の中心となった「五人衆」（三星屋武右衛門・道明寺屋吉左衛門・舟橋屋四郎右衛門・備前屋吉兵衛・鴻池屋又四郎）はいずれも財力と学問への情熱を兼ね備えた有力商人たちです。

彼らは中井斂庵・三宅石庵らすぐれた儒学者を迎えて、その研究と教育活動を支えました。懷徳堂は、そのち斂庵の長男の中井竹山・次男の中井履軒に引きつがれ、大阪商人の知的活動のメッカとして幕末まで大きな役割を果たしています。

この創設五人衆の一人道明寺屋吉左衛門（富永芳春）の三男が、『出定後語』『翁の文』の著者富永仲基（正徳五〇延享三年＝一七一五〇四六）です。

仲基は少年時代から儒教・仏教・神道の膨大な文献を読破し、とらわれない批評眼でその内容を分析、きわめて独創的な思想家として成長しました。

十六歳のころには、早くも儒教の諸学派の欠陥を指摘した『説蔽』（今は伝わっていない）を著し、延享二年十一月に、その主著である『出定後語』を刊行、その三ヵ月後の翌年二月に『翁の文』を刊行、その半年後の延享三年八月、まだ三十二歳の若さで他界しています。

仲基の思想家としての最大の功績は、学問や宗教の発達の原理として「加上」という概念を発見したことに

あります。一つの学説や教理がうちたてられると、必ず、その欠陥や不十分さを批判したり補ったりした新しい説が出現し、つぎにはその新説の上を行こうとする説が生まれます。こうした「加上」によって生まれたのが、儒教や仏教の諸学派・諸宗派であって、すべてが歴史的産物だというのが仲基の見解です。

ところが世の儒学者や僧侶は、自分の信奉する学説や教理だけを唯一最高のものと盲信し、他はすべて邪説と決めつけるから、社会の客観的な現実と食いちがって、実際の役にたたないのだといひます。

仲基は、この立場から仏教の膨大な経典（お経）を精密に研究し、大乘経典とよばれる『華嚴経』『法華経』『涅槃経』などは、釈迦の没後はるかにたつてから、その後継者たちによって、「これこそが釈尊の真意である」として創作された「加上」の産物であることを立証しました。『出定後語』で明らかにされたこの「大乘非仏説」は、さまざまなお経はすべて釈迦が直接に説かれたものと信じきっていた仏教界から猛烈な反発を受けましたが、今日、学問的にはその正しさが完全に立証されています。

徳川宗春の政治論や富永仲基の思想論は、それらがあまりにも先駆的だったために当時の社会から受け入れられませんでした。西川如見や石田梅岩の比較的穏健な論説にしても、多少なりとも体制批判的な部分は無視されて、為政者に都合のよい面だけが評価されてきたようです。

これら先覚者の業績が全面的に研究・紹介されるようになったのは、近代に入ってからのことでした。

しかし、すぐれた思想とその実践は、歴史の表面からは抹殺されても、心ある人々によって地下の水脈のように受けつがれ、どこかで社会に影響を及ぼしているはずです。

本巻で紹介した人々に続いては『自然真営道』の安藤昌益のように、その生きた時代をはるかに超えた人物が輩出していることに、江戸期という時代が持っていた文化的エネルギーの強さを感じずにはいられません。

（吉田 豊）